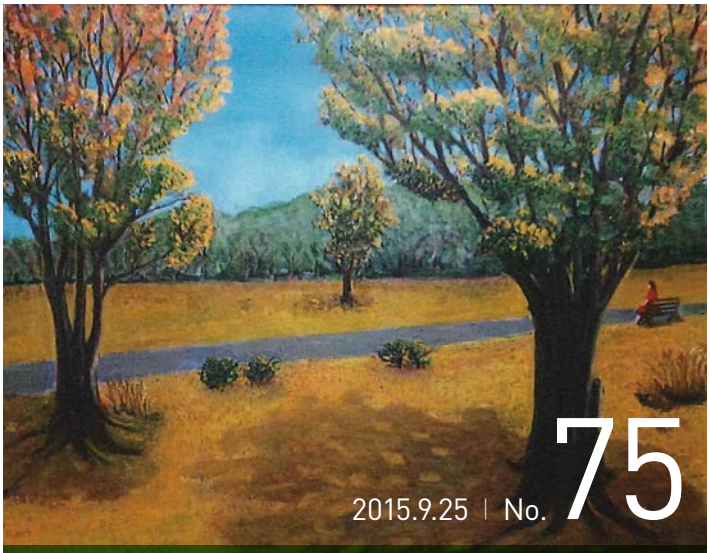
公益財団法人 http://www.jkcf.or.jp

日韓文化交流基金 NEWS

2015.9.25 | No. 75

The Japan-Korea Cultural Foundation



Contents

01-02 日韓国交正常化50周年記念学術大会開催
03 青少年事業
日韓国交正常化50周年記念
青少年交流公募事業決定
04 青少年事業
日韓文化交流基金の青少年交流事業参加者の
作文、『外交青書』で紹介
05 青少年事業
成熟した日韓関係を示す日韓交流の場
06 青少年事業
初めて韓国教員のホームステイを受入れて
07 助成事業
誠信交隣の心を世界に！
NPO 法人朝鮮通信使縁地連絡協議会事務局長
阿比留正臣
08-09 講演会
高麗郡建郡1300年に当たって
高麗神社宮司 高麗文康
10-11 フェロー研究紹介
9世紀日本における新羅人ディアスポラの
復元的研究
明知大学校助教授 鄭淳一
12 日韓文化交流基金事業報告

公益財団法人 日韓文化交流基金　〒105-0001　東京都港区虎ノ門5 丁目12 番1号　虎ノ門ワイコービル4F　Tel:03-5472-4323　Fax:03-5472-4326

日韓国交正常化50周年記念学術大会開催

日韓の諸団体が協同で日韓関係の50年を振り返り、新たな未来を切り開く

2015年6月17日（水）から19日（金）の3日間、「日韓関係、過去を乗り越えて未来を切り開く」というテーマのもと、韓国済州島にて日韓国交正常化50周年記念学術大会が開催されました。日本側は日韓文化交流基金のほか、東京大学韓国学研究部門、日本国際政治学会、現代韓国朝鮮学会が、韓国側は東北亜歴史財団、国民大学日本学研究所、韓国国際政治学会、現代日本学会が主催となり、開幕式には金杉憲治総括公使や趙兌烈（チョ テ ヨル）外交部第二次官、小野啓一外務省北東アジア課長、寺澤元一済州総領事も出席しました。本大会は『日韓関係史1965-2015』の著者やその他政治、マスコミ分野の100名を超える日韓の参加者が、全9セッションに分かれ進められました。平日開催にも関わらず、予定していた日本側参加者は、諸事情を工面し全員が出席しました。ひっ迫したスケジュールでしたが、各分野で活躍する各々の立場から、これまでになく困難な状況にある日韓関係において、どのようにしたら互いに認め合い友好な関係が築けるかなどについて前向きな意見が提示されました。また、両国関係に大きな影響を与える、両国の前線で活躍するマスコミ関係当事者が「報道」の在り方を省み、全体像を伝える重要性について再確認するなど、有意義な機会を持つことができました。

左／多くの参加者で埋め尽くされた会場
右／日韓学術交流を牽引してきた諸先生方によるパネルディスカッション（右から伊豆見元静岡県立大学教授、若宮啓文朝日新聞社前主筆、和田春樹東京大学名誉教授、小此木政夫慶應義塾大学名誉教授、金浩燮中央大学教授、金栄作国民大学名誉教授、朴忠錫梨花女子大学名誉教授、尹正錫中央大学名誉教授）

6/17（水）	開会式 企画映画上映「江戸時代の朝鮮通信使」 基調講演（韓培浩現代日本学会初代会長、高麗大学名誉教授、小此木政夫慶應義塾大学名誉教授）
	ラウンドテーブル 日韓国交正常化50周年に回顧する日韓関係：過去と現在、そして未来
6/18（木）	①新時代日韓関係の構築のための課題
	②東アジアパワー・バランスの変化と日韓関係

6/18（木）	③日韓関係の軌跡　1：社会･文化
	④未来志向的日韓関係の模索
	⑤日韓関係の軌跡　2：経済
	⑥日韓関係50周年とマスコミの責任と役割
	⑦日韓関係の軌跡　3：政治
	⑧日韓交流の観点から見た葛藤と和解
6/19（金）	⑨総合討論：日韓関係の過去を超えて未来に

◆日本側参加者

浅野豊美（早稲田大学）、安倍誠（日本貿易振興機構アジア経済研究所）、粟倉義勝（共同通信）、李鍾元（早稲田大学大学院）、五百旗頭真（ひょうご震災記念21世紀研究機構／熊本県立大学／前防衛大学学長／神戸大学）、池享（ソウル大学校）、伊豆見元（静岡県立大学）、磯崎典世（学習院大学）、出石直（NHK）、大畑裕嗣（明治大学）、奥田聡（亜細亜大学）、小此木政夫（慶應義塾大学）、加峯隆義（九州経済調査協会）、木宮正史（東京大学）、木村幹（神戸大学）、木村拓（東京大学附属図書館アジア研究図書館U-PARL）、佐々木卓也（立教大学）、瀬地山角（東京大学）、高安雄一（大東文化大学）、外村大（東京大学）、中西寛（京都大学／日本国際政治学会）、西野純也（慶應義塾大学）、朴正鎮（津田塾大学）、箱田哲也（朝日新聞）、平岩俊司（関西学院大学／現代韓国朝鮮学会）、細谷雄一（慶應義塾大学）、三ツ井崇（東京大学）、柳町功（慶應義塾大学）、吉岡英美（熊本大学）、吉澤文寿（新潟国際情報大学）、米村耕一（毎日新聞）、若宮啓文（日本国際交流センター／朝日新聞社前主筆）、和田春樹（東京大学）

◆韓国側参加者

康元澤（ソウル大学校）、金基石（江原大学校）、金都亨（翰林大学校）、金文子（祥明大学校）、金相準（延世大学校）、金暎根（高麗大学校）、金榮作（国民大学校）、金龍烈（弘益大学校）、金恩淑（韓国教員大学校）、金泰炫（中央大学校）、金学俊（東北亜歴史財団）、金浩燮（中央大学校）、南相九（東北亜歴史財団）、馬相潤（カトリック大学校）、朴東誠（順天郷大学校）、朴盛彬（亜洲大学校）、朴榮濬（国防大学校）、朴鎮沅（SBS文化）、朴昶建（国民大学校）、朴忠錫（梨花女子大学校）、徐承元（高麗大学校）、鮮于鉦（朝鮮日報）、孫洌（延世大学校）、辛貞和（東西大学校）、沈揆先（東亜日報大）、梁志宇（KBSニュース）、延敏洙（東北亜歴史財団）、吳泰奎（ハンギョレ新聞）、元喜龍（済州道）、尹裕淑（東北亜歴史財団）、尹正錫（中央大学校）、李基東（啓明大学校）、李相賢（世宗研究所）、李時載（聖公会大学校）、李容旭（高麗大学校）、李元徳（国民大学校）、李正馥（ソウル大学校）、李政桓（国民大学校）、李鍾久（聖公会大学校）、李鍾国（東北亜歴史財団）、李志遠（翰林大学校）、李炯植（高麗大学校）、李鎬鐵（仁川大学校）、李熙玉（成均館大学校）、林慶澤（全北大学校）、林相先（東北亜歴史財団）、林永西（MBC）、張博珍（国民大学校）、張濟國（東西大学校）、張勳（中央大学校）、鄭在貞（ソウル市立大学校）、曺良鉉（外交安保研究院）、趙胤修（東北亜歴史財団）、趙兌烈（外交部）、陳昌洙（世宗研究所）、崔永宗（カトリック大学校）、崔恩鳳（梨花女子大学校）、崔喜植（国民大学校）、韓培浩（高麗大学校）、韓相一（国民大学校）、玄昶日（日本テレビ）、黄永植（韓国日報）

日韓国交正常化50周年記念学術大会を終えて

東京大学
韓国学研究部門部門長
木宮正史

『日韓関係史1965～2015』全3巻の編集作業に基づいて済州島で会議を開催するという構想が、韓国側の責任者である李元徳（イ ウォンドク）氏から2014年末に持ち込まれた。さらに、シニア研究者によるセッション、日韓の国際政治学会の合同セッション、ジャーナリストセッション、東北アジア歴史財団のセッションなども加えようということになった。主催団体だけでも8団体になり、責任母体も異なるセッションを同時並行に進めるため、準備過程で多くの混乱や困難が伴った。また、MERS騒動の只中で開催されたために、毎日のように韓国側と連絡を取りながら、延期の可能性も含め開催の可否を話し合った。ただ、ロジなどの実務を担当していただいた日韓文化交流基金の献身的な努力を初め、参加者の方々がすべて前向きで協力的であったことが、予定通りに会議を開催することに大きな助けとなった。この場を借りて関係者各位に御礼を申し上げたい。国交正常化以後の50年の成果をもっと評価するべきだという認識や、日韓関係悪化の責任を日韓双方が共有するべきことについて合意が形成されたことが、会議の大きな成果であった。大使館主催の50周年記念レセプションへの日韓両首脳の不参加という情報が会議最中に流れて一同落胆したが、結局、両首脳は参加を決断し、日韓関係の「潮目」が変わった。

7月12日に、東京大学韓国学研究部門の記念シンポジウムで『日韓関係史1965～2015』のブックコンサートを行ったが、日曜午後にもかかわらず、百名を超える参加者があり、日韓関係の現状に関して日本社会でも高い関心が寄せられていることがうかがわれた。今後とも、日韓関係を合理的で生産的なものにするために種々の努力を傾注していきたい。

『日韓関係史1965-2015』全3巻刊行

本著書は日韓国交正常化50周年を記念し、協調と対立の外交関係を振り返り、未来を構想するべく刊行されます。日韓関係の現状をどう捉えるのか、なぜ日韓関係がここに至ったのか、現状をいかに打開するのか、といった3つの課題を共有する、日韓の研究者たちによる取組の成果です。また、国籍にこだわらず、自国以外の国すなわち日韓を横断して活躍する専門家も著者として加わっており、共同研究における既存の枠組みの限界を克服する新たな試みにも取り組んでいます。

Ⅰ　政治（木宮正史・李元徳[編]）
　6月刊行
Ⅱ　経済（安倍　誠・金都亨[編]）
　7月刊行
Ⅲ　社会・文化（磯崎典世・李鍾久[編]）
　9月刊行予定

日韓国交正常化50周年記念青少年交流公募事業決定

今年度日韓文化交流基金では、JENESYS2.0の一環として、その趣旨に沿った各種事業を企画・実施する団体を公募し、30事業への支援を決定しました。様々なテーマにて行われる事業のうち、招へい事業では日程の一部で東日本大震災の被災地を訪問し、復興の状況について理解を深める各種プログラムが実施されます。

事業名	申請団体	テーマ・目的
日韓が共有する海女文化を世界へ	海女振興協議会	「海女文化」の理解促進・拡大及び、ユネスコ世界遺産登録に向けた共同努力
「草木国土悉皆成仏」～すべての生きとし生けるものの未来へ～第一部・第二部	櫻間會	日韓若手舞踊家たちの相互訪問・共同公演
日韓国交正常化50周年記念事業 「第22回日韓高校生交流キャンプ」 「第10回日韓学生未来会議」	一般社団法人日韓経済協会	（キャンプ）韓国経済・文化の現場を体験し、新たな日韓協力のビジネス案を共同で企画 （未来会議）両国大学生による提案・情報発信を通じた共働プログラム
福島韓国青少年交流招へい・派遣プログラム	NPO法人ふくかんねっと	福島と韓国・全州地域の青少年の交流を通じた、相互理解の拡大
マンガを通じた日韓高校生の国際交流	京都精華大学国際マンガ研究センター	「文化・歴史・実践・教育・受容」の視点から日本のマンガ文化の理解を図る交流プログラム
韓国高校生先端技術および被災地文化体験・交流プログラム	公益社団法人科学技術国際交流センター	先端技術を育む国民性・文化への相互理解
日韓青少年古代文化交流地および万葉関連地域の探訪	東アジア日本語教育・日本文化研究学会	「万葉集」の舞台を韓国大学生が訪問し、古代からの日韓関係について学ぶ
韓国浦項市九龍浦地域青少年の香川県訪問プログラム	香川・浦項文化交流協会	漁業従事者の移住の歴史を通じた、香川県と浦項市の青少年交流
書道を通じての日韓大学生交流	国際書画芸術協会	両国共通の「筆の文化」を通じ日韓交流の歴史と文化を学び将来を考える
「環境資源を活かした先進的なまちづくり、東北の産業振興を学ぶ、日韓青少年市民交流事業」、「韓国江華島の環境・農業再生、歴史・文化に学び、韓日の魅力を共有する、韓日青少年市民交流事業」	NPO法人グラウンドワーク三島	両国の歴史・文化・環境資源を活かした先進的なまちづくり、産業振興の現状を学ぶ
「日韓学生通信使」 日本編・韓国編	天理大学・江原大学校	「朝鮮通信使」の歴史的意義を学び、現代の日韓友好にその精神を生かす道を探る
日韓大学生・院生による合同離島社会調査	鹿児島大学法文学部	離島地域における日韓共通の社会問題に対する認識と解決策の模索
21世紀のユース朝鮮通信使 韓国大学生訪日研修団 日本大学生訪韓研修団	NPO法人日中韓から世界へ	朝鮮通信使の道程をたどると共に交流し、その意味を学ぶ
東海大学コリア語研究室訪韓研修団	東海大学　コリア語研究室	「等身大の韓国を体験」をテーマに文化体験を行い、日本の魅力についても発信
人間と自然、そして平和への想像力が日韓の豊かな未来を築く	一般社団法人国際平和映像祭	東北地域訪問、そして宮沢賢治の足跡を訪ね、日韓の青少年が交流
ふじのくに静岡県・大学生韓国派遣事業	静岡県・大学生韓国派遣実行委員会	「韓国文化理解と日本の魅力の再発見」をテーマに交流し静岡県の魅力もPR
Cool Japan Cool Korea 日韓青年トーストマスターズの集い	東京メトロポリタン・トーストマスターズ・クラブ	日韓の青少年が自国の魅力をスピーチにまとめて発表することを通じた交流プログラム
韓国高校生招へい・日本中学生韓国派遣事業	一般社団法人国際フレンドシップ協会	「人々のくらし・最先端技術・震災後の活力、文化・日本人の活躍」等をテーマにした、各種交流プログラム
両輪で走る韓日・日韓親善交流	（実行委員会）	朝鮮通信使ゆかりの地を、両国青少年が自転車で回りながら、各地の市民と交流
Feel Real Japan and Korea 2015 (日韓国交正常化50周年記念事業)	学校法人鳥取家政学園 鳥取敬愛高等学校	「ホームステイや高校生交流を通じて、今の日本・韓国を感じよう」をテーマに、各種プログラムを実施
一橋大学=ソウル大学　合同セミナー	一橋大学法学部国際関係ゼミナール	一橋大・ソウル大の国際関係を学ぶ学生による、討論会をメインとした学生交流
地域観光資源の開発を通じた日韓青少年交流	東亜大学　国際交流学科	若者の視点から見た日本各地の観光資源開発に関する討論及び提案
GO! 2018総文祭　日韓高校生アートアカデミー（来日・訪韓）	長野県高等学校文化連盟 第42回全国高等学校総合文化祭国際交流委員会	「日韓の高校生　言葉を超えて、アートでつながる」をテーマにした共同の創作活動等
日韓青年の集い―故李秀賢君の足跡をたどって	日韓青年の集い実行委員会	故李秀賢氏の日韓に対する熱い志に共鳴し日韓の未来を語る大学生交流
JENESYS2.0　日本韓国青年交流事業	海友会那賀ブロック	韓国の大学生が「日韓青年の未来のために」をテーマに、和歌山県を中心に様々な体験を行う
「道の駅」を通した日韓文化交流	九州産業大学　商学部	韓国大学生が日本の「道の駅」について学び、農山漁村の地域振興等について考える
第5回国際学生フォーラム	お茶の水女子大学	「日韓文化の相互理解に基づいたこれからの日韓関係のあり方」について日韓の学生が討論
日韓誠信架け橋交流50～互恵・共生への旅	早稲田大学留学センター	朝鮮通信使の「誠信」交隣精神に基づく学生交流を行い、互恵・共生の未来像を考える
第3回日韓視覚障害教師の会親善交流研修会	全国視覚障害教師の会	「同じ思いを共有する日韓の視覚障害教師の交流を深め、絆を強めよう」をテーマに交流
日韓国交正常化50周年記念 東京都立片倉高等学校吹奏楽部INソウル	やまももの会（東京都立片倉高等学校吹奏楽部 保護者の会）	日韓の青少年による吹奏楽の演奏交流を通じた文化理解・交流の促進

日韓文化交流基金の
青少年交流事業参加者の作文、『外交青書』*で紹介

当基金では、日韓文化交流基金創立30周年記念事業の一環として、日韓両国の中学生・高校生を対象とした「作文コンテスト」**を実施しましたが、そのうち2名の作文が『平成27年版外交青書（外交青書2015）』に掲載されました。2人は2015年現在さらに深化した国際交流にかかわっています。

ここで掲載されました作文2編をご紹介します。今後の日韓関係に対する、率直で前向きな考えが述べられておりますので、ぜひご覧ください（所属は現在のもの）。

*『外交青書』とは、国際情勢と日本外交の取り組みについて記したもので、1957年以降、毎年刊行されています。

**日韓文化交流基金創立30周年記念事業は2013年度に実施された事業です。「作文コンテスト」は「私が感じた韓国／日本」「日韓交流について考えること」の二つをテーマに作文を募集したところ、日韓両国205名の生徒から応募があり、合計26名の応募者に最優秀賞を贈呈いたしました。関連記事が『日韓文化交流基金NEWS』第69号にも掲載されています。

《『外交青書2015』に掲載された作文》

「日韓交流について考えること」

福島県立磐城高等学校 1 年生
根本直哉（ねもとなおや）

現在の日本では、頻繁に報道等で耳にする領土問題などを原因に、韓国に対してあまり良くない印象を抱いている人が多いのが現状です。事実、私もこの訪韓研修に参加する以前は心のどこかで韓国への偏見を持っていました。

しかし、実際に韓国の学校を訪れ、言語の壁がある中でも簡単な互いの母国語やジェスチャーを駆使し、現地の学生と一緒に授業を受けたりスポーツに汗を流すことで交流できました。特に驚いた事は、韓国の学生が親切で積極的であったことです。また、そこには世間の考えとは関係なく、一人の人として、互いの国の文化、歴史、価値観を認め合う姿がありました。

今回の訪韓を通して、私の韓国に対する印象は良い方向へと変わりました。今なお当時の友人との交流が続き、体験した事をより多くの人へ広めているところです。だからこそ、若い世代からこのような視野を広げる経験を重ねるべきだと思います。そして、そうして育った人々が、やがて地球人として本当の国際社会を築いていけると信じています。

「韓日交流について私が考えること」

韓国外国語大学付属龍仁外国語高等学校 2 年生
白賀 媛（ペク ハ ウォン）

幼い頃から日本に関心を持ち、高校で日本語を学んでいる私は、一年生の時、香港での世界の高校生の貿易企画コンテストに参加し、日本チームの高校生と出会った。私は嬉しくて自分から声をかけたが、彼らは韓国人が日本人を嫌いだと思っているようで、緊張した雰囲気だった。しかし、互いに相手国の文化を話題に話をするうちに、打ち解けて親しく交流することが出来た。その後、彼らとはメールをやり取りしており、今や日本というと真っ先に彼らのことが思い浮かぶ。

両国には、過去の歴史や外交問題のために、相手に反感を持っている人々が多い。政治と外交は、切れやすくもつれやすい細い糸のようだ。もつれた糸は、解きほぐすのも大変だ。だが、糸にはつなぎ直すことができるという長所もある。

国同士の関係も同様に、安定した関係が危うくなることもあり、その関係を解きほぐすのに多くの労力が必要だ。韓日関係の安定は、政府の努力だけでは難しいかもしれない。何よりも民間交流を拡大し、両国の国民の意識を変えて行くことが大切だと思う。

成熟した日韓関係を示す日韓交流の場

2015年日韓文化交流基金の招へい事業、韓国青年訪日団の引率をした、ソウル市立大学校国際関係学科の李鎭遠（イジンウォン）教授のエッセイが、韓国日本学会*広報誌『KAJA News letter』に掲載されました。昨今の日韓交流を直接経験し、日韓の大学生や地域の人が以前よりさらに深化した交流をしていることについて言及していますのでご紹介いたします。

*韓国日本学会とは、韓国において日本学全般の学問的発展と会員相互間の研究情報交換及び親睦を目的に1973年に創立された。2015年現在982名の会員が所属している。

2015年1月「韓国青年訪日団」という名で韓国の大学生100名が日本を訪問した。学生は3つの団に分かれ、ソウル、釜山、済州から出発し、東京で集合した。9泊10日の日程で、東京や大阪、熊本、鹿児島で、視察見学や同世代の日本の大学生との交流、ホームステイを行った。

今、日韓関係は外交的次元では芳しくない状況である。日韓の相手に対する好感度はある時期よりも良くないという調査結果が出ている。このような中、韓国の大学生たちが日韓文化交流基金の招へい事業で日本を訪問し交流行事を行う事業があり、私は引率として参加した。行事に参加しながら、私は日韓交流の新しい姿を、多く目にした。

まず驚いたことは、韓国で開催される日本関連のプログラムにたくさんの韓国人大学生が関心をもって参加しているという点だ。韓国のメディアに映し出される日本と韓国に対する両国民の認識はたいへん否定的だと言わざるをえない。韓国の人たちは日本の原発事故以来、日本訪問を避けている。また日本の人たちは、韓国人が日本の保守的な社会雰囲気に対し反感を抱いているので身の危険を感じるとして、韓国に足を運びづらくなっていると報道されていた。しかし今回、参加した学生たちはまったくそんな雰囲気ではなかった。そして私たちを迎えてくれた日本の大学生やホストファミリーは、韓国のメディアが伝えるような否定的な印象ではなかった。さらに、参加した学生たちの大部分は日本語をまったく解さなかったが、日本にたいへんな関心を抱いていた。日本語ができる人だけが日本との交流を行うという考えはもう過去の話だ。今や、言葉ができなくても、韓国の学生たちは日本に対して堂々と接しており、自信を持っている様子がうかがえた。

次に驚いた点は、日本の大学生との交流行事と日本政府（外務省）のプログラムが韓国語で進められたという点だ。私が引率した学生たちが訪問した大学では日本の大学生が行事を進行し、日本語と韓国語で進めていた。代表の挨拶をはじめ、進行自体を日本の学生が通訳した。また日本政府も訪日団を迎える際、韓国語に精通している担当者を配置し、プログラムを進めた。それまで日韓の学生交流プログラムといえば当然日本語を話す韓国の学生が参加すると思い込んでいた私は、かなりの衝撃を受けた。今や日本と韓国の立場は過去とは異なり、たいへん相互主義的なものになったと感じられた。

3つ目は変わることのない日本の家庭の学生に対する温かさだ。これまで私は、学生の引率として日本でホームステイをし、日本文化と家庭を体験し、交流する行事にたくさん参加してきた。その時感じた温かさは今でも変わらぬ点である。そして訪日団を迎えてくれた国際交流団体や地方自治体はみなが一体となり、日本の日常の家庭生活を体験させ、その地域を私たちに紹介しようと最善の努力をしていた。今回出会ったホストファミリーの皆さんは韓国に対し単なる好奇心ではなく、韓国との真なる交流に尽力していたと思う。

最近、表面的に見える日本と韓国の関係は良いとは言えない。そして、両国民は現在の両国関係に対し良い評価はしていない。他方、日韓両国関係は良い関係を維持しなくてはならないという点では、両国民みなが同意している。このような状況下で、今回の訪日団で感じた日韓関係は悲観的には見えなかった。さらに上の段階の成熟した日韓関係を築く可能性を見出すことができると信じている。

韓国語で交流会が進行された大学訪問（目白大学）

初めて韓国教員のホームステイを受入れて

室生国際交流村実行委員会
北森義卿

私たち、室生国際交流村実行委員会は11年前、市町村合併前の室生村と呼ばれた時に結成しました。

人口減少や高齢化により地域活力が低下する中、地域の人々の興味と関心を得るような活動を指向していた時、アメリカ、デンバーに本部のあるUp with Peopleという教育財団が日本の京都か奈良で世界の若者のホームステイ（以下、HS）を受け入れてくれる団体を探しているとの情報を得て名乗りを上げた経緯があります。ほとんど英語も話せない地域ですが、豊かな自然ともてなしに富んだ地域であり、田舎の家は大きく間取りも多いということから、ホストファミリー募集にたくさんの人々が応じてくれました。

それから11年、最近ではワールドキャンパスという団体のHS受入を年1回、その他に外務省のJENESYSプログラムを年4回、文科省のマレーシア交流事業年1回など、年6～7回のHS受入を行っています。

従来、JENESYSプログラムでは東南アジアからの高校生、大学生が中心の受入れでしたが、日韓国交正常化50周年の記念する今年、初めて韓国からのHS受入れをするチャンスを頂きました。

ここ数年、日韓政府間の関係がギクシャクしている事や、直前のユネスコ世界文化遺産の認定反対の行動など、一般の日本人として「エー何故!」という事もありました。当委員会ではこの様な時こそ民間交流を積極的に進めようと、HSを引き受けました。韓国の教員団の皆様に、国に帰って自分たちの教えている生徒へ、一般の日本人は友好的だったよと伝えてもらいたいと思いました。我々も頂いたハングル語の資料を読んだり、『チャングム』や『冬のソナタ』に話題がいったりと、訪日が近づくにつれ気分が高揚していきました。

初日の対面式では、やや緊張気味のホストファミリーと、礼儀正しい韓国の先生方との交流が一気に進み、和やかな雰囲気に満たされました。我が家では、嫁いだ娘が昔韓国語を習っていた事もあり、孫達と帰って来て久々の韓国語を楽しんだようです。

3日間のHSといっても、ゆっくり交流出来たのは中1日。日本の一般家庭の食事や習慣、スーパーへの買い物に付き合うなど時間は瞬く間に過ぎ去り、夕方からは近所のホストファミリーと共にBBQを楽しみ、食べ物談議に花が咲きました。

最終日の朝、バスの発車が近づくと各家族と最後の別れを惜しみ、共に涙しながら抱き合い、手を握り合う姿から、感動をいただきました。

今回は教員という大人の方の受入れでした。各受入先では、従来の高校生たちとは違った会話や楽しみがあり、家族のビデオや写真を見たり、出身地や、韓国伝統文化の話を聞くうちに、日本の文化は韓国から渡来したのだと気付かされたり、本来もっと身近な両国だったのだと感じあった貴重な体験をしたようです。

別れて数日経ってからも我が家にHSした全周燦（チョンチュチャン）さんはどうしているかなと、なつかしく思い出されます。今回の受入れを通じて、韓国文化の持つ礼儀正しさや目上の人を敬う儒教の精神の素晴らしさにあらためて気付かされるとともに、李龍宰（イヨンジェ）団長さんにも日本での体験話や貴重な意見をいただく等大変お世話になりました。

今回の受入に際し、宇陀市庁舎では市長、職員が手作りの小旗を用意して玄関前で迎えて下さったり、奈良県立榛生昇陽高等学校でも温かく迎えて下さった事に改めて感謝申し上げます。

新しい国からの人を受け入れる事は、楽しいものです。そんな機会に接することができたことに、すべての受入家庭を代表してお礼を申し上げます。有難うございました。

お別れの朝に

貴重な出会いに感謝（左が筆者）

PROFILE

北森（きたもり）　義卿（よしあき）

室生国際交流村実行委員会会長。ホームステイ体験を通じた交流事業に長年関わり、世界各国からの学生を受け入れている。

誠信交隣の心を世界に!

～朝鮮通信使ユネスコ記憶遺産登録 日韓代表者及び共同学術会議、朝鮮通信使ユネスコ記憶遺産登録シンポジウム～

NPO 法人朝鮮通信使
縁地連絡協議会
事務局長
阿比留正臣

朝鮮通信使

皆さんは、朝鮮通信使をご存じでしょうか？　朝鮮通信使は、室町時代から江戸時代まで朝鮮国から日本に送られた外交使節団のことで、特に江戸時代、隣国と争いのない約260年間が続いたのは、この朝鮮通信使の往来があったからだと思われます。平和の象徴と言ってもよいのではないでしょうか。

ユネスコ記憶遺産

現在、対馬市を中心としたNPO法人朝鮮通信使縁地連絡協議会（18の自治体、44の民間団体、110人の個人会員で組織。以下「縁地連」という）が中心となり、釜山の財団法人釜山文化財団と共に、2016年3月にユネスコへ日韓共同で朝鮮通信使の関係資料を申請する活動をしています。今回、日韓文化交流基金から助成をいただき、タイトルのとおり1月31日に日韓の共同学術会議、翌2月1日にはシンポジウムを長崎市の美術館及び歴史博物館で開催することができました。

日韓共同学術会議

日韓共同学術会議では、日本側が17名、韓国側が11名出席し、申請資料リストの協議を行いました。まずは申請リストの核となる日本側の「国書」と韓国側の「謄録」について登載の確認を行いました。次に資料数が多数となるので、3つのジャンル、①外交使節としての通信使公式文書、②道中の記録（日記・関連資料等）、③文化交流の遺品・関連資料、に分ける協議を行いました。最後に日韓双方の申請リスト案を出し合い、内容についての説明を行いました。日本側は81件について、文化財指定のもの若しくは博物館・資料館所蔵のものを基準として選定された説明がありました。韓国側は国立中央図書館、釜山市立博物館所蔵のものを中心に選定されたというリスト内容の説明がありました。今回の発表は第一次リスト案として次回再度検討されることになりました。

記憶遺産登録シンポジウム

翌日のシンポジウムでは、元日本ユネスコ記憶遺産選考委員の東京大学先端科学技術研究センター所長の西村幸夫先生に基調講演をしていただきました。記憶遺産に登録するために通信使のルートを「シルクロード」のような耳に残るネーミングを考えてみてはどうか？　というような提案もありました。次に、日本側の学術委員会委員長である仲尾宏先生と、韓国側の学術委員会委員の朴花珍（パクファジン）先生による両国からみた朝鮮通信使に関する講話がありました。

ペギンセ舞踊団の河蓮花（ハ ヨンファ）代表による韓国伝統舞踊をはさみ、縁地連の松原一征理事長と日本学術委員会の倉地克直先生をパネラーに加え、仲尾宏委員長がコーディネーターを務められユネスコ記憶遺産登録に向けたパネルディスカッションが行われました。

誠信交隣

現在の日韓政府間は非常に冷え込んでいます。先日、世界文化遺産に指定された明治日本の産業革命遺産でも「強制労働」の文言で一悶着がありました。このユネスコ記憶遺産登録推進活動にどのように影響するのか心配されるところです。しかし、日韓国交正常化50周年の節目の年で、両国とも何か雪解けの糸口を探しているのではないかとも思われます。日韓の関係を修復する糸口は、「朝鮮通信使」かもしれません。対馬藩の儒学者「雨森芳洲先生」が唱えた「互に欺かず争わず真実を以て交り候」という誠信交隣の心をもって推進していかなければならないのです。

朝鮮通信使をユネスコ世界記憶遺産に！　皆様のご理解とご支援をお願いします。

2月1日に行われたシンポジウムの様子

PROFILE

阿比留正臣（あびる まさおみ）

1967年、長崎県対馬生まれ。長崎東高校卒業後、峰町（後に近隣6町が対馬市として合併）に入庁。長崎県ソウル事務所勤務を経て、2011年から対馬市国際交流担当。朝鮮通信使行列振興会のほか、朝鮮通信使縁地連絡協議会事務局を兼任。現在、対馬市観光交流商工課課長補佐。2014年から朝鮮通信使ユネスコ記憶遺産日本推進部会事務局長。

高麗郡建郡1300年に当たって

高麗神社宮司
高麗文康

2016年に高麗郡建郡1300年を迎える埼玉県西部地域では、歴史を土台とした地域づくりの動きが高まっている。高麗郡とは何か？　高麗郡建郡1300年で何が始まろうとしているのか？　高麗家60代当主であり、高麗神社宮司の高麗文康さんにわかり易く語っていただきました。

1．埼玉県日高市

筆者の住む埼玉県日高市は人口約5万7千人。自然が豊かで人心の穏やかな土地柄である。東京から1時間余りで里山の雰囲気を味わうことができる行楽地として知られており、「巾着田曼珠沙華公園」に500万本の曼珠沙華が咲き「曼珠沙華まつり」が開かれる9月下旬はひときわ多くの人々が押し寄せている。

ところで日高市を訪れた人々が脳裏に焼き付けて帰るのは「高麗（こま）の里」という通称である。実際、市内の駅名には「高麗駅」「高麗川駅」、市内を流れる清流「高麗川」、寺社に「高麗山聖天院勝楽寺」や「高麗神社」〈資料Ⅰ・写真〉があり、隣街に向かう峠道は「高麗峠」と呼ばれている。市所有の有形登録文化財「高麗郷古民家」など公共施設にも「高麗」が溢れる。それが埼玉県日高市の特徴である。

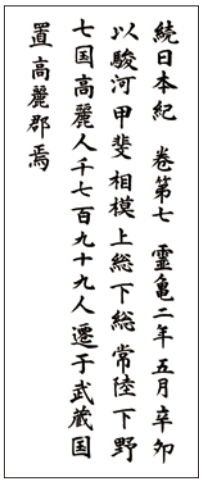
〈資料Ⅰ〉高麗神社社殿

2．高麗郡建郡

『続日本紀（しょくにほんぎ）』第7巻には〈資料Ⅱ〉のような記述が見える。霊亀2年（716）5月武蔵国に東国7国の高麗人1799人が遷され高麗郡が置かれた、というこの記事こそ日高市に「高麗」の名が根付くきっかけを作ったのだ。

それでは、ここで言う高麗とは何なのだろうか。

『日本書紀』欽明天皇31年（570）4月に「高麗使人、辛苦風浪、迷失浦津。任水漂流、忽至着岸。」と高麗からの使節が来日（倭）したことを伝えている。この使いは海路に迷い漂流した挙句、上陸した場所の郡司の姦計により、郡司を天皇と思い込まされてしまう。越の国の住人江沼臣裾代（えぬのおみもしろ）の通報により天皇の知るところとなり、遣使一行は山城国の相楽館（さがらかのむろずみ）に遷され、紆余曲折の末、遣使の使命を果たした。570年に日本との国交を開いた「高麗」は現在「高句麗」として知られている。高句麗は東北アジアの大国として成長した400年代に「高麗」を称するようになった。それ故に『日本書紀』を始めとする日本の史書は「高句麗」をとらず「高麗」と記している。故に高麗郡の「高麗」は高句麗に由来するのである。



続日本紀　巻第七　霊亀二年五月辛卯
以駿河甲斐相模上総下総常陸下野
七国高麗人千七百九十九人遷于武蔵国
置高麗郡焉

〈資料Ⅱ〉『続日本紀』
高麗郡建郡記事

3．高句麗

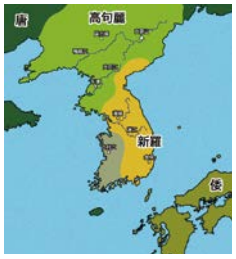
高麗郡の淵源である高句麗はどんな国であったのだろう。

高句麗は紀元前37年の建国とされ668年に滅亡した。始めは現在の中国吉林省に起こり周辺に領域を広げた。5世紀には、中国東北部および朝鮮半島中部以北にわたる広い地域を勢力下に置き最盛期を迎えた。代表的な遺跡は首都が置かれた中国吉林省集安市と北朝鮮の平壌市に多く、これらはユネスコの世界遺産に指定されている。

高句麗文化で著名なものは、古墳壁画、山城、石碑などである。古墳壁画に描かれたさまざまな図柄から高句麗人の生活の有様と精神世界を垣間見ることができる。山城は有事の際の防御に優れた力を発揮した。石碑には「広開土王碑」（中国吉林省集安市）「忠州高句麗碑」（韓国忠清北道忠州市・〈資料Ⅲ・写真〉）などがあり、それぞれ古代東北アジア史を考えるうえで一級の史料である。

高句麗は末期に唐と敵対し、唐・新羅連合軍によって668年に滅亡した。

〈資料Ⅲ〉忠州高句麗碑（韓国忠清北道忠州市）



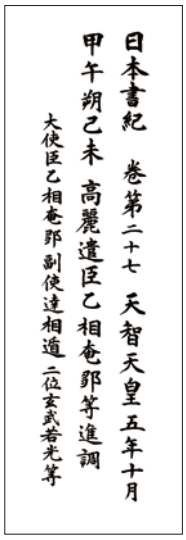
高句麗末期

4．日本に来た高麗人の行方

666年長年にわたる唐との抗争に加え、内部分裂も表面化した高句麗は滅亡の危機を迎えていた。10月、この年2度目の使節が高句麗から日本へ派遣された。日本に高句麗の危急を伝え救

援を求めたであろうこの使節団に「玄武若光」がいた〈資料Ⅳ〉。この人物こそ、後に大和朝廷から「従五位下」の位と「王（こきし）」の姓を賜り、高麗郡初代郡長となる高麗王若光であろう。若光らを始め前後して派遣された使節団は高句麗存続のため必死の努力をしたのであろうが、668年高句麗は滅亡した。

高句麗滅亡後、朝鮮半島の権益をめぐり同盟関係にあった唐・新羅が対立し、670年代までその抗争が続く。ようやく半島の動乱が沈静化した685年大和朝廷は、日本にいる渡来人に爵位を与えた。同時に渡来人の東国遷住を進めており高麗人たちもこうした流れの中で東国に遷り住むようになったのであろう。


日本書紀　巻第二十七　天智天皇五年十月
甲午朔乙未　高麗遣臣乙相奄郭等進調
大使臣乙相奄郭副使達相道　二位玄武若光等

〈資料Ⅳ〉『日本書紀』
高句麗使節来日記事

大宝3年（703）若光に「王」の姓が与えられた。この時13年後の高麗郡建郡はすでに計画されていたのではないだろうか。1800人近い人々の移動には長い準備の期間が必要である。さらに高麗郡が置かれた地域は当時入間郡内の閑地である。高麗郡建郡に至る道程には大和朝廷、高麗人の有力者、武蔵国の有力者の介入と結束があったはずだ。高麗人の行方には多くの関心が寄せられていたのだ。

高麗郡末期

5．高麗郡建郡1300年を迎えるにあたって

平成8年10月19日、高麗郡初代郡長高麗王若光を祭神とする高麗神社の例祭直会の席上、宮司式辞に立った高麗澄雄（当時）は「20年後に迎える高麗郡建郡1300年は地域を挙げて盛大にお祝いをしたい」と述べた。高麗郡建郡1300年への初めての言及であった。当時傍らで式辞を聞いた筆者は先代澄雄の言葉の真意を充分に理解しないまま時間を費やしたが、廃止から100年を経て人々の記憶から消えかかっていた高麗郡の認知度を上げようと、平成14年に「高麗郡建郡1300年記念事業」を開始した。約10年の活動が実り、平成23年に民間の任意団体「高麗郡建郡1300年記念事業委員会」が発足した。同会は平成27年4月に「一般社団法人高麗1300」となり、明年の当該年を盛り上げるため準備を進めつつ、「1300年」以降も継続する息の長い活動を模索している。

日高市役所にも市長を委員長とする「高麗郡建郡1300年日高市実行委員会」が組織されたことで行政と民間が一体となった取り組みが期待されている。

6．終りに

今から1300年前、大和朝廷は武蔵国に高麗郡を置いた。国を失い、波濤を越え、苦難の末に日本に定着した高麗人にとって、祖国名を冠する郡の設置は、感慨深いものであっただろう。数多くの渡来人が日本に定着したものの、その多くは足跡すらうかがい知ることができない。それに比して当地に高麗人の足跡が残るのは、明治29年（1896）までの1180年間にわたり高麗郡が存続したからである。高麗神社に伝わる『武蔵国高麗氏系図』には「高麗姓の事、郡名にして軽ろからず」の一文が見える。長い歳月を経て尚、人々が高麗郡に深い思いを寄せていた証左であろう。高麗郡建郡1300年を迎えるにあたって、そんな現代の「高麗人」が育つことを願ってやまない。

PROFILE

高麗文康（こま ふみやす）

1966年生。1990年、國學院大學文学部神道学科を卒業、2007年1月20日、高麗神社宮司を拝命。高麗神社祭神高麗王若光（こまのこきしじゃっこう）を開祖とする高麗家の60代目当主。合気道五段。著書に『高麗神社』（さきたま文庫・共著）、小説『陽光の剣～高麗王若光物語』（幹書房）がある。

「日韓交流おまつり in Tokyo 2015」（9月26、27日、日比谷公園）

日韓文化交流基金は〈一般財団法人高麗1300〉、〈日中韓から世界へ〉、〈朝鮮通信使縁地連〉のご協力を得て、展示ブースと試着ブースを運営します。当日は、色彩豊かな女性用はもちろんのこと、かわいい子供用衣装、狩猟などに着用した男性用衣装も取り揃えています。各ブースでは韓国の青年がお待ちしています。是非この機会に日韓両国の絆を感じていただきたいと思います。

講演会で披露された色彩豊かな高句麗衣装に聴衆の目がくぎづけになりました。

9世紀日本における新羅人ディアスポラの復元的研究

―貞観年間における九州地域の新羅人集団を中心に―

明知大学校助教授
鄭淳一

1　方法論としての「新羅人ディアスポラ」

本研究は、9世紀の列島社会において展開した「新羅人ディアスポラ」現象を文献史料や考古資料を通じて具体的に復元することを目指すものである。ここで重視する「9世紀」という時期は、人々の活発な国際移動を特徴としている。もちろん、ヒトが国境を越える行為自体は古くから確認でき、まったく新しいこととは言えない側面もある。ただし、王権以外の勢力・集団・個人が周辺諸国をしきりに行き来した事例は、以前にはなかった新局面であり、本研究でいう「9世紀」を他の時代と区別させる要素でもある。興味深いのは、こういった国際移動の痕跡ほとんどが新羅人と関わっている点である。日本列島の立場からみても当該時期の新羅人の来航が国家的な懸案になる程であった。

そこから「新羅人ディアスポラ」という用語の有効性が浮かび上がる。「ディアスポラ（diaspora）」とは、元の国家や民族の居住地を離れて暮らす国民や、民族集団ないしコミュニティ、またはそのように離散すること自体を指す言葉である。元々はパレスチナの外で暮らすユダヤ人集団のことを意味したが、語義が転じて現在は離散・散在・分散を表わす用語、ないしは他の国民や民族を含めた一般の離散定住集団を指す言葉として使われている。本研究が「新羅人ディアスポラ」という用語にこだわることも、それが当時においての新羅人の国際移動を最も適切に表現していると考えるからである。

9世紀の新羅人に注目した先行研究は少なくない。張宝高（張保皐）に関する研究が代表的である。しかし、史料に名も残していない、不特定多数の新羅人らに焦点をあて、彼らが離散する現象自体に関心を注いだ論考は管見の限り、目にすることが難しく、また離散の結果、辿り着いた地域（国家）が彼らに対してどう対応したのかを、一貫性を保持しつつ考察した研究も見当たらない。そのため、筆者はここ数年間にわたり、そのような問題を解き明かす作業に力を入れてきたのであり、本研究においても新羅人の来航（渡航）・滞在（一時滞在、短期滞在、長期滞在、永住など）を「ディアスポラ」的現象という枠組みのなかで論ずるわけである*。

本研究で重視するもう一つの課題は「新羅人ディアスポラ」を視覚的に「復元」することである。新羅人と頻繁に接触した日本列島の島嶼部・縁海部はもちろん、新羅人の主な移配地であった東国地方・東北地方をフィールドにしてディアスポラの痕跡がどのように残っているのかを考古学の発掘成果を通じて確認していく。「9世紀」という時期に展開した「新羅人ディアスポラ」の跡は列島社会の各地に分布しているが、ここでは範囲を絞り、いわゆる「貞観11年（869）新羅海賊」事件を処理する過程で顕在化した九州地域の新羅人集団の動きを中心に紹介する。

2　日本型「新羅坊」の存在

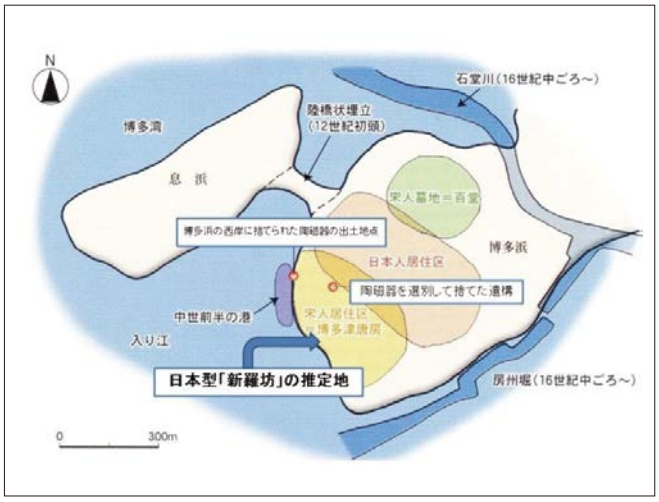
『日本三代実録』によると、貞観11年（869）5月22日の夜、新羅海賊が船2艘に乗って博多津に現われ、豊前国の年貢絹綿を掠奪して逃げ去ったとある。よって、直ちに兵士を発し、追いかけたが結局捕まらなかったという内容である。いわゆる「貞観11年（869）新羅海賊」による年貢絹綿奪取事件なのである。ところで、この事件の処理過程で大宰府管内、すなわち今日の九州地域に集団的に居住する新羅人の存在が明らかになる。

本来「新羅坊」とは、唐に形成されていた新羅人社会のことを指す。そこでは新羅人らが通訳・官吏・商人・運輸業者など、職業や性格の面で多様な存在様態として暮らしていた。さらに、新羅人のみが孤立した形で居留したのではなく、唐人や日本人など、様々な国家および地域の出身者たちと「雑居」状態をなしていた。興味深いのは、9世紀当時の九州地域にも「新羅坊」と呼ばれるべき新羅人集団居住区が存在していたことである。

この日本型「新羅坊」には、唐のそれと同様に多様な職業に従事する新羅人らが共に住んでいた。僧侶集団や造瓦技術者はもちろん、「交関」すなわち交易に従事する者も数多かった。特に、交易従事者のうちには物品の売買を担当する商人、物資の運搬を担う船積業者あるいは運輸（運送）業者、異国商人との意思疎通を担当する通訳など、交易行為から派生する諸般業務の担い手が混ざっていた可能性が高い。また、同一人物が複数の業務に従事する場合も少なくなかった。

それでは、九州地域の「新羅坊」はどこに位置していたのだろうか。まず、それが「貞観11年（869）新羅海賊」事件の処理過程で顕在化した事実に注目すべきであろう。「貞観11年新羅海賊」が博多の港湾に入って豊前国の年貢物（絹綿）を奪取したことから、日本側の年貢受取システムに詳しい現地協力者の存在を想定することができよう。協力者のうちには日本人も含まれていたかも知れないが、新羅人橋民が主軸をなしていたことも考えられる。彼ら自体が「新羅海賊」の一員だったのか否かは別にしても、海賊事件以後、大宰府管内に長期居住していた新羅人集団が容疑者として浮上した事実は示唆するところが大きい。日本型「新羅坊」も博多津からさほど離れていないところにあったものと推定される。

博多遺跡群は「新羅坊」が立地していた可能性が最も高い地域である【図1】。9世紀後半以後に編年できる多くの遺物や住居・生活遺跡が多数確認されている点をはじめ、後の12世紀のことではあるが、宋商人のチャイナタウンである「博多唐房（坊）」も当該遺跡群に位置していた点、優れた港町に加え、船舶の頻繁な往来および恒常的な交易活動を強力に支える背後地を確保していた点などが主要な根拠としてあげられる。

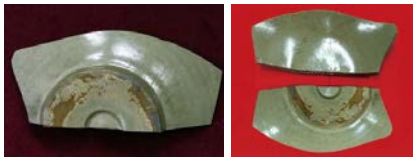


【図1】「新羅坊」の推定値（大庭康時『中世日本最大の貿易都市：博多遺跡群』新泉社、2009年、23頁を修正）

3　武蔵国・上総国の新羅人たち

九州の新羅人らは、東日本の各地に移配される。武蔵国や上総国も新羅人たちが配置された地域である。それはなぜなのか。武蔵国は7世紀末頃から韓半島系（原文ママ）の人々（いわゆる「渡来人」）が定着した地としてもよく知られる。百済人の定住、高麗郡および新羅郡の成立事例からみて、武蔵国は東国の諸国のなかでも流入異国人と最も親密性がある地域であったと充分考えられる。9世紀後半に新羅人らをそこに移配したのもそのような伝統的な異国人受入地域としての性格に期待するところがあったからなのではないかと思われる。上総国への新羅人移配は僧侶集団を定額寺に安置することを核心内容としていた。貞観年間（859～877年）は国家が定額寺に高い関心を示した時期であり、定額寺制度を通じて地方寺院の私的経済を公的領域に編入させようと努力した時期であった。九州在住の新羅僧・沙弥を上総に移配させることによって一地方の定額寺を公的に活用し、また同時にそのような関係確認ないし関係設定を通じて中央の支配権力を浸透させる方便にしたものと考えられる。

古代上総国の中心であった現在の千葉県市原市領域からは、初期貿易陶磁【図2・3】や異国から流入されたとみられる青銅製匙【図4】が出土している。両方とも東日本では出土例が少ない、きわめて稀な遺物である。ふだんは列島社会の玄関口である西日本から出土するモノが東国地方に流入された経緯については、今後さらなる検討が必要であろうが、そのとき、中国や韓半島で確認される類似遺物との比較分析も大いに参考になるだろう。



【図2】荒久遺跡出土の青磁碗破片（市原市教育委員会提供）

【図3】荒久遺跡出土の白磁碗破片（市原市教育委員会提供）

【図4】萩ノ原遺跡出土の青銅製匙
（左：筆者撮影／中：市原市教育委員会提供）

4　陸奥へ赴いた造瓦技術者

最後に九州から陸奥へ赴いた造瓦技術者集団について考えてみよう。新羅人たちが持っている技術やその伝授が求められた理由は、その1年前（＝869年）に発生した大震災による被害を復旧するためであった。未曽有の自然災害により、破壊されたり、損傷を受けた列島の地域社会が、異国人の技術や才能のおかげで復興できたことは考古学発掘成果を通じても明らかになっている。与兵衛沼遺跡から出土した棟平瓦【図5】は陸奥に流入された新羅人技術者の痕跡を裏付ける良い事例と言えよう。

【図5】新堤地区出土の棟平瓦（筆者撮影）

5　新羅海賊事件から「交流」と「共存」を考える

以上から確認できるように、九州地域における新羅人集団居住の実態が明らかになったきっかけは貞観11年（869）の新羅海賊事件である。従来の研究ではこの海賊事件を日本･新羅間の「葛藤」「対立」を象徴するものとして取り上げてきたのだが、そのような評価は国境をまたぐ地域で発生する諸現象を統制・管理しようとした中央権力の立場が色濃く反映されたものに過ぎない。むしろ、当該事件を通じては、多様なレベルの日本人・新羅人たちが活発に「交流」を行ない、場合によっては日本列島の各地で「共存」していた様子が読み取れるのではないだろうか。

＊具体的には、拙著『九世紀の来航新羅人と日本列島』（勉誠出版、2015年）を参照してもらいたい。

PROFILE

ジョンスンイル
鄭 淳一

1979年、韓国生まれ。専門は日本古代史、東アジア海域史。早稲田大学大学院文学研究科より博士学位取得。現在、明知大学校（人文教養）助教授。著書に『九世紀の来航新羅人と日本列島』（勉誠出版、2015年）などがある。

日韓文化交流基金事業報告

本号では、2015年度第1四半期（2015年4月1日から6月30日まで）の実施事業を紹介します。

1 青少年交流事業

訪日団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
韓国教員（第1団）	李龍宰（イ・ヨンジェ）深遠高等学校校長	20	7	13	5/19～5/28	奈良県宇陀市 中央大学杉並高等学校、奈良県立榛生昇陽高等学校、賢明学院中学高等学校
韓国教員（第2団）	金英吉（キム・ヨンギル）天旺中学校校長	20	9	11	5/19～5/28	兵庫県淡路市 郁文館夢学園、柳学園中学高等学校、賢明学院中学・高等学校

川越散策（韓国教員訪問団第1団）

海外感染症対策にご協力いただいた方への感謝

日韓文化交流基金理事長
小野正昭

日韓交流事業の担当者として一瞬たりとも気が抜けないのは、交流に参加する学生の健康維持と安全確保です。治安や衛生面で比較的安心な国とされる日韓両国の安全環境は、年々厳しさを増しています。最近では、不幸にして、大規模自然災害（東日本大震災）や人為的災害（福島原発やセウォル号事故）などの余波で、両国間の交流事業にも影響が出ました。

また、本年5月には中近東を発生源とする感染症MERS（中東呼吸器症候群）の罹患者が韓国で確認され、高い致死率や当初の情報の錯綜もあり、一気に内外で懸念の声が高まりました。このため当基金で今年6月に予定されていた韓国からの訪日研修団も韓国側の意向で延期を余儀なくされる等、具体的な交流面で深刻な影響を受けました。私ども基金の職員は、日韓国交正常化50周年の今年は交流活動を拡大したいと意気込んでいただけに、MERSの急速な拡大を目の当たりにして、一時はどうなることかと大変心配しました。

今回MERSという未知なる脅威に直面し、当基金が重視したことは、正確な情報の把握と、専門家の意見の政策への反映でした。また、様々な報道が飛び交う中で私たちは根拠のない情報に惑わされないよう心掛けました。WHO（世界保健機関）を注視し、特に6月13日、17日の次の発表に注目しました。

1.（一部の地域および国で渡航自粛勧告が出されたが）韓国との、旅行・貿易を制限する必要はないこと
2.韓国では（多くの学校が休校としたが）休校にする必要はないこと
3.罹患者は院内感染によるもので市中まで感染は広がっていないこと

更に、外務省診療所の仲本光一所長、東京医科大学病院渡航者医療センターの濱田篤郎部長（医学博士）と相談し、両専門家の意見に基づき問診票を作成しました。同問診票により研修に参加する学生の訪日前の健康チェックを徹底し、受け入れる学校やホストファミリーの理解を得るよう努めました。幸い、6月末には感染症は収束に向かい、7月以降交流事業は大きな変更もなく実施されております。

ここに改めて、MERSの発生にもかかわらず、韓国との様々な交流に尽力された日本側関係者、ホストファミリーの皆様のご協力に感謝申し上げます。

当基金は、今後も安全かつ安心して交流事業を推進するべくまい進してまいりますので、皆様のご理解とご支援をお願いいたします。

表紙絵画紹介

『初秋（油彩100号）』（作者：楢﨑正博）

日本と韓国は共に北半球に位置し、同じように四季折々に樹木が変化していく中で暮らしている。木々が四季それぞれに変化していく様子は、韓国の歌の文句にもあるように、望郷、哀愁といった思いを人々にいだかせる。これも木々のもっている力強い生命力のなせる業であろうか。この絵は紅葉の始まった頃の木に盛夏の中、良く頑張り、ご苦労様でしたという気持ちをこめて描いたものである。